

## AIのおかげで絶好調？

【物語編】

### ■リビング

薫と茉奈はテーブルでレポート課題に取り組み、翔平は PC を横に置きつつ、ワイヤレスイヤホンを身に付け、スマホで動画を見ている

薫、嘆きながら

薫「ああ、このレポートほんとに大変！」

大袈裟な薫の様子を見て笑う。ふと翔平を見て

茉奈「翔平は余裕そうだけど、課題終わったの？」

翔平、得意げに

翔平「うん。AIのおかげで絶好調！」

茉奈「あれ？ 課題にAIって使ってよかったっけ？」

翔平「もちろん、そのままコピペなんかしてないよ。それに参考文献としてしっかり載せたしね。」

PCを開いて、茉奈に完成したレポートを見せる翔平

茉奈「参考文献にAI？・・・って何それ？」

面白がって

薫「なんかさあ、最近 AI 使って課題をした生徒たちがさ、みんな同じ間違いして先生にバレたってニュースあったよね。」

翔平がぎょっとして、急にスマホを口元によせ、何かを話しかける（なんとなく「おかん」と言ってるのが聞こえてくる）

茉奈「あったあった！ 確か AI が参照してる元のウェブページに誤りがあったんだよね。・・・にしても、なんでAIが間違っていないか確認しないのかなあ。」

薫「AIってたまに嘘情報入れてくるもんね。」

翔平が続いてまた、スマホに何かを話しかける

茉奈「そうそう。しかもそれっぽく説明するんだよね・・・って翔平？さっきから何してるの？」

翔平「「おかん」に今その話聞いてた。」

茉奈「おかん？っていま翔平がハマっているAIだよな。」

翔平「うん、「おかん」も茉奈と同じ意見みたい。真偽をきちんと確認しましょうって。」

茉奈と薫、お互いに顔を見合わせて苦笑する

茉奈「意見？ うーん・・・」

薫「・・・でも真偽の確認ってどうやるのが正解なんだろう。茉奈はどうやってる？」

二人の話を聞きつつ、翔平はまた、スマホに何か話しかける

茉奈「私は少なくとも情報の出どころは確認するかな。色々検索しても、その参照元が全部一緒ってこともよくあるし・・・で、参照元の信頼性も確認する・・・それから、ネットの情報だけでいいかどうか判断しないとね。」

薫「そっかぁ、結局楽はできないんだね。」

明るい声で

翔平「でも、回答時に、参照元を示してくれる AI もあるんだって。そういうのを使う手もあるよね。」

「そういうのを使う手もあるよね」と話をしているときには、翔平は、二人に対するとともに、スマホに向かっても話しかけている

溜息をつきながら

薫「ってのが「おかん」の意見ね。」

翔平「まあね。」

ワイヤレスイヤホンからおかんの声を聴き、突然深刻そうに

翔平「え？」

あきれながら

薫「今度はなに？「おかん」に叱られた？」

翔平「・・・「おかん」がさぁ、プライバシーや著作権を侵害しないように、入力データにも気を付けてって言うてる。」

茉奈「そりゃそうでしょ普通・・・って、もしかして翔平！ 入れてるの？」

薫「は？ まさか、私たちの情報も入れて「おかん」に聞いたりしてるってこと？」

翔平「いや、あのぉ・・・「おかん」と会話すると、癒されるんだよ。それで、つつい個人的な相談とかもするからさ。俺とか友達の・・・プライバシーとか個人情報・・・みたいなやつ？ 入力したことがない…わけではない・・・っていうか。」

翔平、徐々に小さな声になっていく。薫と茉奈、心配そうに顔を見合わせる

## 【解説編】

### ■リビング

天の声「翔平くん、浮かない顔ですね。」

翔平「AI「おかん」は、もう僕の生活の一部なんです。これまで通り個人的な相談にはのってもらいたいし。僕は今後どうしたらいいですか？」

薫「いやそういう問題じゃなくて。AIに入力したデータって、AIに使われてしまうんですね？」

#### 心配そうに、うなづく茉奈

天の声「みなさん、色々心配が生じたようですね。

では最初に、薫さんと茉奈さんの心配ごとから考えてみましょう。

AIに入力された利用者のデータがAIの学習に使われるかという問題ですが、使われる場合もありますし、使われない場合もあります。使っているAIシステムの利用規約などを確認してください。」

薫「なるほど、わかりました。」

翔平に目線を送る

#### 薫の目線を察知して

翔平「・・・調べてみます。」

#### スマホに話しかけようとする翔平にむかって

薫「ちょっと翔平！「おかん」に聞くんじゃなくて、「おかん」の利用規約を調べてよね」

#### しょんぼりしながら

翔平「・・・あ、はい。」

スマホを操作する

天の声「さて、ここで気を付けておくべき点は、AIは、利用者が入力したデータを学習に使う可能性があるということ。そして、一度学習されてしまうと、その情報は簡単には削除することはできないという事実です。

ですから、基本的には他人のプライバシーにかかわるデータは入力しないように気を付けましょう。」

茉奈「便利だけど、怖いところもあるんですね。こうしたAIの危険性を抑制するルールのようなものはないのでしょうか。」

天の声

「EUでは、AIを包括的に規制するルールであるAI規則が制定され、段階的に施行が進められています。ここでは、AIシステムのリスクに応じた対応が定められています。」

薫「受容できないリスクって、具体的にどんなものがあるんですか？」

天の声「例えば、人の潜在意識に影響を与えるように情報を提示するシステムや、思想信条を推測・推論するシステムのようなものです。EUのAI規則では、これらの使用は禁止されています。」

薫「個人の権利や自由が侵害されてはいけないということなんですね。」

天の声「はい、そうです。これから、皆さんがAIを利用する場面も増えるでしょうから、その際には、どのようなリスクがあるかを考えるようにしましょう。」

スマホで調べていた翔平、うなだれる

翔平「どうしよう。調べたけど入力されたデータを「おかん」が学習に使っているのかわからなかった。」

薫「え～、じゃあ私たちのプライバシーはどうなるの？」

天の声「だからこそ、入力してよいものとダメなものは自分できちんと線引きした上で、AI を利用することが大切なのです。翔平くん、わかりましたか？」

翔平「はい・・・」

天の声「では次に、翔平くんの問題について考えてみましょう。

まず、AI には様々な可能性があります。

例えば、翔平くんが使っているような対話型の AI では、24 時間気兼ねなくやり取りができます。回答の誤りへの対応が必要になることもありますが、総合的に見て、人的コストの削減が見込まれます。また、人を心理的に癒す効果が期待できる場合もあるでしょう。」

翔平「そうなんです！ 友だちに相談しにくい話も「おかん」には気軽にいつでも聞けるし、答えを聞けると安心するんですよ。」

翔平の嬉々とした様子に、じっとりとした目で翔平を見る茉奈と薫  
その目を見て、翔平は、また、しょぼんとする

天の声「気持ちはわかりますが、すぐにそれらしい回答を得られることによって、自分の頭で考える習慣を失っていませんか？」

翔平「・・・そうなんですか？」

薫「そうだよ！ ってか、イヤホン外したら？」

翔平、渋々イヤホンを外す

天の声「さて、AI にはもう一つ問題も指摘されています。

AI が、事実と反する回答をもっともらしく生成する現象を「ハルシネーション」と呼びます。幻覚のことですね。

この現象の原因は、学習データの誤り、学習データの偏り、学習不足、などが考えられます。」

茉奈「それって AI が使う学習データの整備が必要ってということですか？」

天の声「そうとも言えますが、膨大な学習データを念入りに調べるには限界もあります。

そこで、信頼性の高い外部情報を追加で与えて回答を生成するなど、誤りがない情報を生成するためのさまざまな取り組みがなされていますが、完全ではありません。

いずれにせよ、得られた情報の真偽は、必要に応じて確認しましょう。

そして最終的には、自分自身の判断基準を持って行動することが大切です。

それは、参考にしたものが、AI からであっても人からの助言であっても変わりません。」

翔平、薫、茉奈「わかりました。」

翔平の PC を覗き込みながら

茉奈「ところでさあ、翔平のレポートも、間違いがないかきちんと調べた方がいいんじゃない？」

翔平「え？」

茉奈「ほら」

画面内を指さす

茉奈「少なくともここ。絶対、間違っていると思うけど？」

翔平「ああ～！ レポート、最初からやり直しだあ」

翔平が慌て、薫と茉奈が笑う